私たちにもできる

子どもの貧困について考えよう 食を通じたつながりづくり

日本の17歳以下の子どもの7人に1人が経済的な貧困状態にあるといわれており、山口県でもひとり親世帯を中心に子どもを取り巻く状況は年々と厳しくなっています。コープやまぐちでは、3月25日に第一線でご活躍されている杉山美羽さんを講師に迎え、学習会を開催しました。

子どもの貧困問題は、お金だけでは解決できない部分が多くあります。共に「困っている子を放っておかない」地域を作っていきましょう。

今回教えてくださったのは…

- 認定NPO法人 山口せわやきネットワーク こども明日花プロジェクト ソーシャルワーカー
- 山口県こども食堂支援センター 統括コーディネーター
- NPO法人フードバンク山口 理事

杉山 美羽さん

年々深刻になる子どもの貧困問題

OECD(経済協力開発機構)の作成基準に基づく厚生労働省の国民生活基礎調査によると、日本の17歳以下の子どもの貧困状態は、7人に1人(13.9%)で、ひとり親世帯になると2人に1人(50.8%)が経済的な貧困状態にあるといわれています。これは世界の先進国の中で最も悪い水準です。

「貧困」は、「絶対的貧困」と「相対的貧困」に分けられます。とりわけ日本では、「相対的貧困」にあたる子どもたちが多く、見た目では分かりにくいことが問題を複雑にしていることがあります。

- **絶対的貧困**…必要最低限の生活水準を維持できない状態。(食糧がない、生活環境が劣悪、など生命の危機がある状態)
- **相対的貧困**…平均的な家庭の子どもなら当たり前の環境や体験が経済的な貧しさから与えられていない状態。

所得で見ると、世帯の所得が『所得中央値の半分=「貧困線」(H30年は127万円)』に満たない状態のことを言います。

貧困が子どもたちに与える影響

幼少期の経済状態は、後々の進学率や就職、持ち家率などに大きくかかわることが研究によって明らかになっています。また、習い事やイベントに参加するなどの「体験」によって子どもの成長を支える〝非認知能力〟を育てることができると言われていますが、現代では、「体験」をするのにもお金が必要です。そのため、貧困状態にある家庭の子どもたちは十分な体験ができないままに大人になり、貧困の連鎖を生んでしまうことが指摘されています。

こうした状況の中で、私たちに出来ることは何があるでしょうか?「食」の支援を通じて子どもの貧困の現状を知り、何らかの支援を継続することが、子どもたちの「体験」となり、成長を見守ることにつながると考えています。

- **認知能力**…知能検査で測定できる能力のこと
- **非認知能力**…主に意欲、自信、忍耐、自立、自制、協調、共感などの私たちの心の部分である能力のこと

私たちにできること

その1 子ども食堂

子どもがひとりでも来られて無料または安価で食事ができる食堂

子ども食堂は、「子どもだけで来られる食堂」として東京都で始まりましたが、現在では、地域の誰もが来られる新たな地域交流の場、また子どもを見守り支える場として広がっています。山口県でも年々増え続け、2022年3月時点で105箇所あります。

今年度は県内7か所で開設セミナーを行います。お近くの会場で開催される際は、ぜひ話を聞きに来てください!

子ども食堂について詳しくはこちらをご覧ください。

その2 フードバンクポスト

まだ食べられるのに廃棄される未利用食品を必要な人に届ける活動

フードバンクポストに入れられた食品は、フードバンク山口を通じて、子ども食堂などの食料を必要とする方々に届けられています。山口県では約80箇所(2022年3月現在)あり、「ここと」全店にも設置しています!

今年度はレノファ山口の全ホーム戦でフードドライブを行います!地域や職場、学校でも開催できますので、お気軽にご相談ください。

フードバンクについて詳しくはこちらをご覧ください。

講演会を終えて

参加者さんの声

人生観の変わるお話でした

普段の生活では、貧困の認識は全くありませんでした。お話を聞き状況がよく理解できました。豊かな経験に基づいた内容で説得力があり大変参考になり、これからの人生観が変わりました。

参加者さんの声

できるところから関わっていきたい

「子ども食堂」という言葉は最近よく耳にし、配布物で見る機会が増えましたが、私が思っていた以上に多くの役割を担っているのだと思いました。なかなか関わることがありませんでしたが、フードバンクなど出来る所から関わっていけたらと思います。

杉山さんよりメッセージ

あなたの一歩が10年後の地域を変える

非常に熱心に聞いていただき、話す私も熱が入りました。また質問もとても考えさせられるものばかりでした。こんなに真剣に子どものことを考えてくださる大人がいることに救われ、今後も多くの方のお力を借りながら事業を進めていきたいと感じました。「貧困」や「孤立」は見えにくいですが、みなさんのすぐ身近に存在します。そして困っている子は声をあげてはきません。ぜひ一歩踏み出して、地域の子に声をかける、または声をかけられる場所に出かけてみてください。その一歩が、10年後の地域を変えていくと思います。